

「房総のむら」は、参加体験型の博物館です。原始・古代から近・現代までの衣・食・住・技の移り変わりを、当時の環境の中で、お客様が直接体験することができます。

開館時間 9:00~16:30  
 休館日 月曜日(休日の場合は開館し、翌日休館)  
 年末年始(2015年12月25日~2016年1月1日)  
 臨時休館日(2015年6月16日、9月8日、  
 2016年1月26日、2月16日)  
 入場料 一般300円(240) 高大150円(120)  
 ※中学生以下と65歳以上は無料。  
 ※障がい者手帳をお持ちの方と、  
 介助者1名は無料。  
 ( )は20人以上の団体料金。

# 瓦版

# 大ホウ

2015年(平成27年)3月20日

編集・発行  
 千葉県立房総のむら 指定管理者  
 公益財団法人 千葉県教育振興財団  
 房総のむら  
 〒270-1506 千葉県印旛郡栄町龍角寺1028  
 TEL:0476(95)3333  
<http://www.chiba-muse.or.jp/MURA/>

平成二十六年度 トピックス展 より  
**「小旅行の地 ちば」**  
 —山中コレクションにみる千葉の海水浴—

千葉県は江戸からも近く、三方を海に囲まれていることで、湿潤で温暖な気候であったため、江戸時代からの観光地でありました。明治に入り、汽車が整備され、東京から交通の便がよくなった船橋から木更津・鴨川にかけて海水浴場が設置されました。

本展示では、海水浴をテーマとし、木更津海岸、館山の北条海岸、鴨川の海水浴場を明治時代の山中コレクションにのこる絵葉書と現在の様子を比較することで海水浴のもつ意味が時代で異なることを紹介します。



木更津海岸の様子

山中コレクションは旧印旛郡長・安房郡長を歴任していた山中家当主により収集されたことがわかってい

て山中コレクションと呼んでいます。さて、当時の海水浴は現代のような娯楽性をもつ言葉が指すわけではなく、江戸時代から大正期までは医療行為と考えられていました。



木更津海岸 浮島の遠景

ます。絵葉書は明治から昭和にかけてのもので、千葉県だけで七百三十八点が確認されています。これらを総称し

日本で最初に海水浴という語を使うのは明治十四年(1881)『内務省衛生局雑誌「海水浴説」』です。海水浴の目的や方法が紹介され、海水浴の効果を知らしめ、習慣にしたと著されており、明治初年は海水浴をする者もなく、海水浴場も存在しなかったことがわかります。ともあれ海水浴の歴史は比較的浅いことがわかります。そして、大正十一年(1911)年『水泳大観』

のなかで海水浴と水泳の違いを定義していません。海水浴は娯楽性が強く、遊技の一つ。水泳は身体と精神の作業力を向上させる鍛錬であるとあります。このことから、医療行為としての認識ではなくなっていることがわかります。

最後に、展示品の一部を紹介します。当時の木更津海岸で上の写真は子どもが泳ぎ、その様子をツバの大きな帽子を被った女性が見ています。下段はカメラを模した絵葉書でレンズ部分に海岸の様子を写し、ボディの一部に当時の水着をデザイン化し、海が凪いでいる様子も窺えます。

現在も房総地域が海水浴場として活気を呈している原点に立ち戻り、現在と過去を比較できる展示となっております。ぜひお楽しみください。(石毛弥一郎)

平成26年度 トピックス展  
**「小旅行の地 ちば」**  
 —山中コレクションにみる  
 千葉の海水浴—

会期 平成27年3月7日(土)  
 ~6月7日(日)  
 場所 風土記の丘資料館 2階

## むらの体験風景をのぞく 商家 細工の店「きよすみ」 「達人講座へ竹細工コースより」

ざる・かご等の竹製品は、プラスチックや金属製のものになってしまったものが多く、今では、あまり身近なものとはいえなくなっています。一方で、竹製品や木製品は、環境にやさしい自然素材として、見直されつつあることも事実です。

商家「細工の店」では、「房州うちわ」をはじめ、竹を素材としたものづくりの体験を用意しています。中でも「むらの達人講座・竹細工日曜コース・金曜コース」(平成二十六年度全十一回、二十七年からは全六回となる)は、専門的な道具を用い、時間をかけてざるやかご作りに挑戦し、伝統技術を習得していただくとするものです。

このコースではまず、「房総のむらにある真竹(まだけ)の竹林で、良い竹の見方を学びつつ、切り出します。さらに均等な幅や厚さに割ったり、へいだりします。この幅と厚さを均等にする技術が作品の良し悪しを左右します。ですから、そのための練習と技術習得には、とても時間がかかります。

次に、四つ目や六つ目等の竹の基本的な編み方を繰り返し練習しながら、より高度な編み方や形にも挑戦していきます。基本を覚えると様々な竹

編みや細工の練習ができるようになりますが、講師の先生が、体験者の技術と希望に合わせて作品作りに挑戦させてくれます。すでに数年かけてではありますが、プロ級の実力を身に付けている体験者もいるほどです。

講師である間野政勝さんには、房総のむらで二十年以上にわたりご指導いただいておりますが、県内の他の自治体でも竹細工の講師として活躍されています。その技を楽しい会話と併せて体験いただける貴重な機会となっております。

なお、平成二十七年からの本コースへの参加には、別演目の「竹細工講習会」へ三回以上の参加を条件としています。この講習会は一日限りの参加で済みますので、初心者にお勧めです。初心者には、他に加工済みの竹を編んで仕上げていく「かご・ざる」「菓子入れかご」などもお勧めです。詳しくは当館発行の体験のしおりをご覧ください。(福田 久)



むらの達人講座(竹細工コース)

## むらの体験風景をのぞく 「柿渋作り」 上総の農家

番傘、団扇、漁網…かつてこれらに共通して使われていた果物といえ、そう、「柿」です。

渋柿の未熟な青い実を潰し、圧搾汁を発酵させて作る液体を「柿渋」といいます。発酵による悪臭を発し、一見すると怪しげな茶色い液体ですが、柿の中に含まれる「柿タンニン」には防水・防腐効果があるため、古くから木製品・和紙への塗布や、麻・木綿などの染色に利用されてきました。柿渋が歴史上に現れるのは鎌倉時代からで、材料の入手や製法が簡単なことから、房総でも各地で使われていました。戦後の化学塗料や化学繊維の普及に伴って需要が激減してしまいました。

当館「上総の農家」では、八・九月の二日間で「柿渋作り」の体験を



1日目: 臼と杵を使って渋柿を潰す



2日目: 発酵し始めた柿汁をテコの原理で絞る

実施しています。一日目は、柿の渋が多くなる八月下旬に行い、渋柿を潰し、水に浸して樽に仕込みます。そして二日目(二週間後)の体験で、仕込んだ柿汁をひたすら絞り、柿の渋を採集するのです。この時には既に発酵が始まっており、独特の「いい臭い」に来館者の皆様も顔をしかめていました。ただし、使用するには更なる発酵を待たねばならず、絞ってから二年程経過したものが、粘り・色ともに最適と言われていますので、もう暫くお預けです…。

近年、柿渋は建築塗料や化粧品、民間療法薬として、ひそかにその効能が見直されています。私たちは、柿渋の発酵を待ちながら、更なる利用法の確立を期待することに致しましょう。

平成二十七年の「柿渋作り」は、八月三十日、九月十三日の二日間実施します。ご予約は六月二日より受け付けます。定員は四名です。

(萩原 衣美)



## 古墳を探検する —黄泉の国 探検ツアー—

風土記の丘の見学コースの中で一番人気があるのが、黄泉の国探検ツアーです。

これは房総のむらに隣接する林の中に点在する岩屋古墳とみそ岩屋古墳ほかを巡検するものです。

ツアーの状況をスケッチしていきましょう。集合場所で秘密の地図が手渡されます。自分たちがどこにいるのか？考えなければなりません。「どこだかわからない」「わからない」

昭和五十年ころの地図ですから。ヒントは風土記の丘資料館の建物だけです。ちなみに房総のむらの開館は昭和六十一年、地図には載っていません。

出発です。大木戸を出て二・三分歩きます。舗装道路の前で立ち止まって前方の小山を指さし、古墳番号を発表。参加者は初めて自分の位置が判ります。

「ええ、ここか。」「こんな近くに古墳が。」  
一歩踏み出せば龍角寺塚群。石塔が直線状に並んでいます。龍角寺へ向かう参道であり、現在の道路が江戸時代以前から使われていたと説明する。

「昔と今に感動。」「昔の人も歩いた。」  
数分歩いて、みそ岩屋古墳に到着。見学者の隊列が一直線状になっていることを互いに確認して、コーナーを曲がると、ほぼ直角。方墳を足で

確認する。懐中電灯の薄明かりの中に石室の奥壁や側壁が見えてくる。これが死者の眠る部屋。いざなみといざなぎの神話を語る。

「よもつ平坂は二mほどの短い坂。」「神話は大げさだ。」「以外と狭い。」  
左に眼をやれば土の小山が。これが岩屋古墳だ。一辺八十m、高さ十三mの日本一の方墳。

石室の鍵を開け、中をのぞき込む。薄明かりの中に石作りの部屋が。奥に石で区切られた棺床が。石室は古墳の中心まで続くという噂もあるが、意外に短い。ツアー参加者のみの特権で頂上に登る。

墳頂で風に吹かれる。印旛沼を眺める。印旛の古代に思いをはせる。「でかい、でかい土のピラミッド。」「二つの石室、妻、夫、それとも兄弟、妹か？」

平成二十七年度も実施します。お申し込みください。(折原 繁)



## ボランティア 活動記 ③ むらの自然ガイド ボランティア

「むらの自然ガイドボランティア」は十二名の登録者で、むらの自然に関する活動を数多く行っています。

むらの主催活動として、毎月一回土・日を利用して、来館者

を館内の植物を中心に一時間程の案内をする「自然観察会」を実施。最近ではお馴染みの方も増えてきました。また、四・七・十月のそれぞれ二日間開催する「里山ギャラリー」

は、来館者がむらの中で撮影した写真に俳句などの言葉を添えてもらい一枚の作品を作り上げ、展示します。添える言葉に皆さん悩みますが、出来上がった作品を見て、ニッコリする方がほとんどです。

体験行事の協力活動では、「さくらまつり」で館内のサクラ開花情報や種類の説明・案内を行い、秋の「稲穂まつり」では、イネの品種や昔の農具の説明や体験を行っています。

この他にも、いくつかの行事で、植物を中心としたむらの中の自然の紹介を行っています。

このように、多くの方々を案内するに当たっては、植物の生息している場所はもちろん、植物自体への豊富な知識が必要です。そのため、ボランティアの皆様は、常日頃から勉強熱心です。そして、個々の知識の

向上はもちろんですが、グループの意思の疎通を十分に図るために毎週研修としてむらの中の観察会を実施しています。その結果は、毎回房総のむらのブログに「花だより」として掲載し、現在の植物の状況を多くの方々に伝わるようにしています。

更に、月に一度、「自然だより」として、開花の状況等を示したものを受付近くに掲示し、来館者への情報提供をしています。皆さんの研究熱心さには、本当に頭が下がります。

これらの活動の他に、環境保全に関わる意見をいただいたり、来館者に植物をより身近に感じてもらうために、植物名の看板の設置・整備等を行っています。

以上のように、多くの活動は、房総のむらの体験の柱の一つとなっている「自然に親しむ」において、無くてはならないものとなっています。(野口 行雄)



# 平成二十七年度の幕開け

## 「イベントいっぱい 楽しさいっぱい」

### さくらまつり

四月四・五日（土・日）の両日、さくらまつりを開催します。房総のむらの約五十一ヘクタールの敷地内に、ソメイヨシノ、山桜、大島桜やしだれ桜など、三百本を超える桜を見ることができ、これらの桜を主役に、様々な催しを行います。また、隣のドラムの里でも、第十四回「栄町さくらまつり」を同時開催しますので、一緒にお楽しみください。



桜の中の舟遊び

平成二十七年度、初のおまつりを楽しんでいただけるよう、春の訪れを華やかに彩るような放下芸や南京玉すだれなどの大道芸上演の他、桜と共に優雅な音を楽しんでいただける箏の演奏も行います。

また、桜の中の舟遊びや漉いた紙に桜の花弁形の千代紙を散らす紙漉き、館内の桜の種類について自然ガイドボランティアが解説する「サクラいろいろガイド」などさくらまつり限定の演目を多くそろえて、皆様のお越しをお待ちしております。

暖かさを感じはじめる春の一日を、ご家族やお友達と、房総のむらで過ごされてみてはいかがでしょうか。

（大久 真由）

### 春のまつりと端午の節供

五月のゴールデンウィークに開催する「春のまつり」（三日～五日）は、過ぎしやすしい春の陽気に加えて、館内の木々の新緑と草花に包まれながら、「昔のあそびと暮らし」をテーマにした盛りだくさんの企画を、お手ごろな値段と時間で満喫できます。もちろん、無料体験や雨天時にも楽しめる体験・実演も用意しております。

子ども忍者からお姫様・お殿様など、時代劇の主役になりきれ「時代衣裳変身体験」、竹馬、ベーゴマ、けん玉の実演・指導などの「むかし遊び体験」、猿回しや滑稽芸などの「大道芸」、県指定無形民俗文化財「おらんだ楽隊」の上演等々、子どもから大人まで「安・近・楽」で充実した一日を過ごすことができます。

また、まつり開催期間中の年中行事として「端午の節供」の展示も行います。商家の街並みと武家屋敷、農家の軒先や屋根にはヨモギとシヨウブの束が飾られます。また、武家屋敷には鍾馗幟（しょうぎのぼり）、おまつり広場の農村歌舞伎舞台の両端には武者絵の幟が立ちます。さらに、広場にはたくさんの鯉のぼりが泳ぎ、子どもたちの健やかな成長を願い、見守ってくれています。

商家街並みの辻広場では、日本さくら草の展示を見ることができ、緑豊かな房総のむらの自然と併せて、可憐なさくら草にしばし気を留めてみるのも、一興かと思えます。

（福田 久）



時代衣裳変身体験

### 編集後記

○ 三寒四温という言葉のよう  
に、日ごとに寒さも緩み始め、  
房総のむらでも草木が芽吹き、  
色とりどりの草花がきれいに  
咲き誇っています。まさに春  
を迎えています。

春は「希望に溢れる季節」と  
いわれます。房総のむらも新  
しい年度を迎えるにあたり、こ  
れまで以上にたくさんの皆さ  
んに喜んでいただける博物館  
を目指して努力をしています。  
いと意を新たにしています。  
たくさんの皆さんの御来館を  
心よりお待ちしております。

○ たくさんの皆様にご愛読い  
ただいている広報誌「瓦版 大  
木戸」ですが、平成二十七年度  
より当館ホームページ上での  
公開とさせていただきますこと  
しました。

ご愛読いただいている  
皆様にはお手数をお  
かけしますが、下記アド  
レスにアクセスしてい  
ただき、閲覧をお願い申  
し上げます。

平成二十七年度も年  
間二回の発行を計画し  
ております。

今後とも御支援、御協  
力をよろしくお願い申  
し上げます。

（飯田 和宏）

<http://www.chiba-muse.or.jp/MURA/>